様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年　４月１９日現在

機関番号：10104
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2011
課題番号：20520273
研究課題名（和文）近代ドイツ国家意識を背景とした国民祝典劇・記念碑の発展と衰退を探る

研究課題名（英文）　On the development and decline of the national festspiel and monument which the national consciousness as a background brought

研究代表者
鈴木　将史（SUZUKI MASAFUMI）
小樽商科大学・言語センター・教授
研究者番号：20216443

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学
キーワード：ドイツ文学、祝典劇、記念碑、19 世紀転換期文学

１．研究計画の概要

本研究は、前回研究（平成 17－19 年度基盤研究Ｃ「近代ドイツにおける精神的及び物質的モニュメント（祝典劇・記念碑）の諸相を探る」）の成果を踏まえ、古典主義（ゲーテ・シラー）時代の祝典劇研究から開始し、近代（19 世紀初頭から 20 世紀初頭まで）におけるドイツの祝典劇及び記念碑の個別的成立背景とその意義、また両者の関連性（成立経緯・モティーフなど）を調査・比較・分析し、これらのモニュメントをドイツ精神史の流れの中に位置づけることを目的とする。それにより、後のナチズムの核となった狂信的愛国心へとつながる１９世紀転換期におけるドイツ固有の国民意識の実体を究明したい。また、前研究と合わせて、中世よりのドイツ祝典劇・記念碑の全貌を明らかにすることができれば、本研究の大きな成果となるであろう。特に祝典劇に関しては、ひとつの文学的ジャンルと捉え、その発展過程を解明する計画である。

また、個別的な記念碑研究に関しては、１９世紀転換期にかけて国民記念碑が大型化した後、２０世紀初頭には、ドイツ全土にビスマルクを礼賛した「ビスマルク塔」なる（ビスマルク像を掲げない）モニュメントが続々と建設された。ビスマルクは祝典劇においてはそれほど脚光を浴びなかったモティーフであるにもかかわらず、なぜこのような奇異な現象が帝国末期のドイツに生じたのか、ビスマルク崇拝に象徴される近代ドイツ特有の精神構造を考察の対象としたい。

２．研究の進捗状況

(1)平成 20 年度は、人文主義時代に誕生し、啓蒙主義時代に体裁を整えた祝典劇が、ゲーテ・シラーの宮廷国民祝典劇を経て近代国民祝典劇へと発展する経緯についての分析を目的として、ゲーテの『パレオフロンとネオテルペ』・シラーの『芸術への敬意』を分析・考察した。ゲーテ・シラーのドイツ文学における位置づけは、既に極めて多角的な立場から究明されているが、祝典劇の分野においても両者はそれぞれ特別な地位を占めていることが今回の研究で明らかになったのである。

(2)平成 21 年度は、ゲーテ時代以降のドイツ祝典劇が、ロマン主義を経て本格的な国民祝典劇へと進化し繁栄を迎えるその経緯と実態の実証的分析を目的として、レヴェツォウの『エピメニデスの裁き』及びブレンターノの初期国民祝典劇『ライン川に、ライン川に！』を取り上げ、更にヴィルデンブルーフ、ハイゼ、ローデンベルクといった 19 世紀中盤から後半にかけての繁栄期の祝典劇を分析・考察した。そこでは、様々な小道具を用いた祝典劇の様式美が完成の域に近づきつつあり、結末に描かれる平和とは、戦争での勝者に訪れる平和なのであり、勝利の輝かしい報酬として歓迎され、敗者はただ忘れ去られるのみである構図が明らかになった。

(3)平成 22 年度は、ドイツ帝国建国以降の世紀転換期ドイツ国民祝典劇の詳細な実態と、その精神性の特徴の究明に努めた。ホーフマンの『三戦士』及びベームの『セダン、或いは 25 年後』とダーンの『モルトケ』、更には女流祝典劇作家ヨハンナ・バルツの一連の祝典劇を分析・考察したが、これらの祝典劇に

は、ドイツ帝国の優秀性、神聖ローマ帝国の系譜に連なる正統性を訴える意図が色濃く認められることが判明した。特にプロイセン王妃ルイーゼを題材に取るバルツの祝典劇は、ルイーゼの両帝国を橋渡しする「国母」としての役割が強調されている。記念碑研究も同時に進め、国民記念教会の典型例として「ケルン大聖堂」を考察し、「ラインの守り」という言葉に象徴されるドイツの国体意識の芽生えの結実である「ニーダーヴァルト記念碑」を分析した。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。
(理由)
　祝典劇研究においては、研究計画の概要に沿い、当初の目的どおりにほぼ進捗しているが、記念碑研究に関しては、「ケルン大聖堂」と「ニーダーヴァルト記念碑」の研究に時間を予定以上に要してしまい、「ビスマルク塔」研究への予備研究が十分遂行できなかったため。

４．今後の研究の推進方策
　既に 19 世紀転換期にさしかかり成熟期を迎えた国民祝典劇の検証は半ば以上その目的を達成した。今後は 19 世紀前半から第一次世界大戦にかけての祝典劇の分析を進めていきたい。この時期は帝国成立の高揚感も失せ、愛国精神にも陰りが見え始めてきた期間である。従って、そのような国民意識の変化が実際の祝典劇にどのような影響を与え、祝典劇がどのように変質していくのかを追い求めたい。そして、20 世紀初頭に現れたパロディ祝典劇にも調査の対象を広げ、それらの作品群が如何なる社会的・精神的背景によりもたらされたのか、その状況を詳細に分析する予定である。また、記念碑の集大成である「ビスマルク塔」の到達点に祝典劇の理念がどのように関わりあっているのかも考察したい。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）
①鈴木将史、「ドイツ近代国民記念碑について（その２）―『ケルン大聖堂』から『ニーダーヴァルト記念碑』まで」―」、『小樽商科大学人文研究』、第 121 輯、97-111 頁、2011、査読無
②鈴木将史、「ドイツ国民祝典劇の繁栄（その２）」、『小樽商科大学人文研究』、第 120 輯、67-96 頁、2010、査読無
③鈴木将史、「ドイツ国民祝典劇の繁栄」、『小樽商科大学人文研究』、第 119 輯、55-88 頁、2010、査読無
④鈴木将史、「ゲーテ以降の祝典劇－レヴェツォウとブレンターノー」、『小樽商科大学人文研究』、第 118 輯、 129-143 頁、2009、査読無
⑤鈴木将史、「宮廷祝典劇の終焉と国民祝典劇の誕生－ゲーテ・シラーの祝典劇－」、『小樽商科大学人文研究』、第 116 輯、21-38 頁、2008、査読無